

Music Café

川井龍介

224

音楽や歌との出会いは、意外なところにある。昨年末、都内で開かれた「生誕100年記念マザー・テレサ写真展」に出かけたときのことだ。1970年代からインドでマザーの写真を撮り続け、個人的にも彼女と親交のあった沖守弘氏の作品展で、私はその会場で沖氏と会う約束をしていた。彼を待つ間、写真を見ていると歌声が聞こえてきた。

その時初めて知ったのだが、この夜、写真展に合わせ「マザーの言葉を歌にして」というコンサートがあり、Uという女性歌手がリハーサルを始めたところだった。ホールで映画のスクリーンのような大きなマザー・テレサの写真がバックに、黒のロングドレスのすらりとした女性が歌っていた。その声を聴き始めて程なくして、いくつもの分かりやすい言葉がやさしいメロディーに乗って響いてきた。

マザー・テレサの言葉をメロディーにのせて……

「今の世界は……皆とても忙しそうで……家庭や家族との生活にはほんのわずかばかりの愛しか……」

もう少し聴きたいところだったが、時間がなかった。彼女のCD「運命の詩 マザー・テレサに捧ぐ」(Bdama

Records)を入手して帰り、あとで聴いてみた。CDは5曲入りでそのうち4曲にはマザー・テレサが生前語った言葉にメロディーがつけられ、1曲はピアノをバックにした朗読だった。ライブで聴いた通りのシンプルで分かりやすい言葉が歌になって、すっと入ってくる。バックのアコースティックなチェロやピアノ、ギターも自然な味わいだ。

それから1週間ほどして彼女に話を聞く機会があった。

U



歌になった詞は、マザー・テレサが生前人々に語った言葉を日めくりカレンダーのように編集した「マザー・テレサ日々のことば」(いなますみかこ訳、女子パウロ会)という本の中の「日替わりの言葉」にUがタイトルとメロディーをつけて曲にしたという。

「マザー・テレサについてはレビなどで幼いころに知り、その生き方に感銘を受けていました。それが07年にマザーのドキュメンタリー映画やこの本に出会い、私も何か伝えたいと思い、言葉をもとに楽曲作りを始めました」

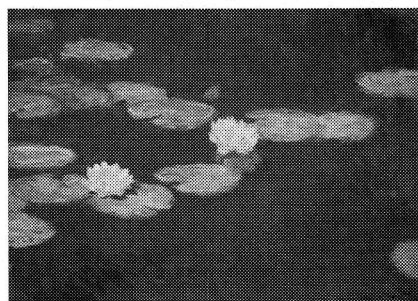
短大卒業後、16年間、航空会社で旅客機の客室乗務員をしたが、社会の階層や人間の平等について徐々に考えさせられ、自分の生き方も問い直した。その結果、かつての夢でもあった歌手の道を目指し、00年にデビューした。これまでオリジナルをはじめ童謡やジャズも歌ってきたが、マザーとの出会いが一つ大きな道標となったようだ。

小村ジヴェルニーに集ったモネと仲間たちの作品展

パリ北西部にある小村ジヴェルニーは、モネが住み着き名作を残した地として知られる。当地で描かれたモネの作品と、モネにあこがれ移り住んできた画家たちの絵画を紹介する展覧会が開催中だ。東京・渋谷、Bunkamura・ミュージアム(東京都渋谷区道玄坂2-24-1)での「モネとジヴェルニーの画家たち」展(2月17日まで、03-3477-9413)。

Art info

印象派の旗手として斬新な絵画を手がけていたクロード・モネは、1883年からジヴェルニーに移り住んだ。村はひっそりとしていたが、セーヌ川沿いの丘陵地で四季折々の自然の風景が美しい。睡蓮、積みわら、ポプラ並木といったモネにおなじみのモチーフは、この地で見いだされ描かれていった。村にはしばしば、モネを慕う画家が訪



クロード・モネ「睡蓮」1897~98年 個人蔵

れた。土地を気に入って滞在制作をすることも多かったようだ。一時期は50人以上が集まり、アーティスト共同体ができあがったこともある。今展では、モネの「睡蓮」や「積みわら(日没)」などとともに、ジヴェルニーに集った画家たちの作品も多く集められた。モネの友人ピエール・ボナールの「にぎやかな風景」、アメリカ印象派を代表するリチャード・ミラー「水のある庭」など、降り注ぐ柔らかな光と豊かな自然を感じさせる作品がそろった。平穏な光景に囲まれながら、新しい絵画表現を求めて探究を繰り返した画家たちの息吹が伝わってきた。 (山内宏泰)